

## サルオガセに五一ワイン

新田由紀子

唐松はぐすんだ緑の針のような葉をまとつてまだ色づいてはいなかつた。あたりは密な霧に覆われて、それがすうつと動くので風があるのでわかる。

濃く薄く動くのは霧だけではない。幹に苔のようないものを這わせた唐松も袖を振るようにして揺れている。樹木に袖のあるはずはなく、よく見ると、繊細なレースの袖のようになものは山の藻サルオガセだ。

行程を急ぐ山歩きでは、過ぎ去る点景として見慣れたサルオガセ。天女が木の枝に置き忘れたような風情の薄衣。それをじっくりと間近に見ることができた。それだけでも、思い立って南信諏訪を望む懐かしい入笠山にやって来た甲斐がある。

登山田和ではないとわかつていたが、初秋の湿原の花を求めてエイツと大きなリュックを背負い、千九百八十の高所までやつて來た身に無情の雨模様。細かい雨は霧になつてまばらなハイカーの鮮やかなウエアを濡らし、いかにも侘しい。駅で買った弁当を食べようにも、屋根のある東屋は見当たらない。いつもは、木道を上がつてくるハイカーに気軽に声をかける山彦荘の主も、今日は出て来ない。

頂上を目指すピークハントが目的ではないから、晴れていよいがいいが、これでいい。あるがままの佇まいの山を楽しむ。見えるはずの息を飲むような八ヶ岳の絶景も南アルプスの山塊も自分の脳裏に幾層にもなつて思い起こせる。まして、若い頃仲間たちと通つては作り上げた山荘のあつた山も峰続きだ。懐かしい回想の入笠山。定宿のマナスル山荘のガラス戸の音もまもなく聞える。チェックインは一時だから、とにかくお弁当を食べるとしよう。軒の張り出した売店の横にレインウエアのまま腰を下ろす。山道を隔てた目の前は天女の羽衣、サルオガセを纏つた唐松林だ。あるかなきかの風が霧を運ぶ。麓で買った信州ご当地五一ワインの赤白カップを片手に抱え、蓋を開けて乾杯。ようこそサルオガセ、ようこそまた再びの入笠山。